

今回から「助動詞」に入ります。ここが古典文法学習のひとつの山になります。

助動詞は、主として活用語に接続し、意味を付加する付属語です（ただし、断定の助動詞「なり」「たり」は体言に接続します）。

助動詞を学習するに当たっては、それぞれ、「接続」「活用パターン」「意味」を覚えることになるのですが、一つ一つ覚えていくのではとても大変です。そこで、次の手順で学習していきます。

- ①助動詞の接続を覚える
- ②助動詞の活用パターンを覚える
- ③助動詞の意味を覚える
- ④間違いやすいパターンを押さえる

この上記①～③について、**助動詞をグループ化して覚え**、最後に④を確認して実践力を付けていきます。

では最初に、「**助動詞の接続**」から見ていきましょう。

助動詞はすべて、接続する活用形が決まっています。そしてほとんどの助動詞が、未然形、連用形、終止形のどれかに接続します（例外は後述）。以前に記した、各活用形の性格と、接続する助動詞一覧をまとめておきましょう。

## 1 助動詞の接続

### A 未然形・動作の未完・未実現を表す

接続する助動詞ーる、らる、ず、さず、しむ、む、じ、ず、まし、まほし

### B 連用形・動作の既実現を表す

接続する助動詞ーき、けり、つ、ぬ、たり(完了)、けむ、たし

### C 終止形・動作そのものを表す

接続する助動詞ーべし、まじ、らむ、らし、めり、なり(推定・伝聞)

※ラ変・ラ変型活用では、「連体形」に接続するので要注意！

### D 連体形・助動詞が接続する場合、体言相当と考えられる

接続する助動詞ーごとし、なり(断定)

※なり(断定)は体言にも接続、たり(断定)は体言にだけ接続

### E 特殊・助動詞「り」はサ変＝未然形接続、四段＝已然形接続と考える

(「サ未四已」と覚えるとよい)

以上です。当面、これだけしっかりと覚えておきましょう。

なお、念のため、これについて説明をしておきますが、覚えるのは上記の一覧で十分でしょう。まずはDとEから補足しておきます。

Dについて。

「ごとし」は、「名詞+の+ごとし」「動詞・連体形+が+ごとし」の形が原則です。この「動詞・連体形+が+ごとし」の「が」が省略されることがあり、その場合、連体形接続となるのです。また、断定の助動詞「なり」は、格助詞「に」とラ変動詞「あり」が融合して生まれた助動詞なので（ $n i \cdot a r i \rightarrow n a r i$ ）、格助詞は名詞に付きますから、その性格を引き継いで、体言と体言相当である動詞の連体形に接続します。断定の助動詞「たり」も、格助詞「と」とラ変動詞「あり」が融合して生まれた助動詞で（ $t o \cdot a r i \rightarrow t a r i$ ）体言に接続しますが、動詞には接続しません。

Eについて。

「り」は、接続の判定が困難な助動詞です。というのも、この助動詞は四段活用とサ変の連用形に、ラ変動詞「あり」が接続して生まれた助動詞だからです。例を見てみましょう。

咲き・あり（ $s a k i \cdot a r i$ ） $\rightarrow [i + a \Rightarrow e]$  $\rightarrow$ 咲けり（ $s a k e r i$ ）

し・あり（ $s i \cdot a r i$ ） $\rightarrow [i + a \Rightarrow e]$  $\rightarrow$ せり（ $s e r i$ ）

この例で言うと「咲け」「せ」が動詞と判断されるので、残った「り」が助動詞となったわけですが、これは音韻変化で生まれた助動詞なので、そもそも何形接続と判断できないのです。なので便宜上、「サ変・未然、四段・已然」としてしています。こういう助動詞は「り」だけなので、ひとりぼっちで「サ未四已（さみしい）」、と覚えるのが古典的です。ただ、これより重要なのは、エ段に接続している「ら・り・る・れ」は完了の助動詞「り」だ、と見抜くことでしょう。

さてA、B、Cについても補足しておきます。

Aについて。

未然形は未完・未実現を表します。

未完であることから、動詞自体を補完する助動詞、受身の「る」「らる」、使役の「す」「さす」「しむ」が接続します。

ちなみにこの「る」「らる」「す」「さす」「しむ」は、動詞にしか接続しません。つまり、直接に動詞を補う働きを持っているのです。なお、「る」「す」は四段・ナ変・サ変に接続し、「らる」「さす」は上一・下一・上二・下二・カ変・サ変に接続します。未然形の音を見てみると、なんとなくその理由がわかると思います。なお、「しむ」はすべての動詞に接続しますが、これは漢語由来（使）だからでしょう。

また、未然形は未実現を表すことから、まだ実現されていないことを表す「む」（推量）、「じ」打消推量、「ず」（打消）、「まし」（反実仮想）、「まほし」（願望）が接続します。

Bについて。

連用形は動作の既実現（すでに実現している）を表しますから、過去「き」「けり」、

完了「つ」「ぬ」「たり」、過去推量「けむ」といった助動詞が接続します。ただ、完了の「り」についてはEの解説で述べたとおりです。

毛色の違うのが「たし」（願望）です。願望なのだから動作は実現していないのでは？というの当然の疑問でしょう。実は、この語は、形容詞「いたし」が語源で、「～いたし（～がはなはだしい）」と言っていたものが、「～たし（～たい）」の形・意味になって生まれた助動詞なのです。ちなみに「たし」が用いられるのはだいたい鎌倉時代以降、新参者なので少し毛色が違っているのです。

Cについて。

終止形は、文末言い切りでも用いるので現在形と思われがちですが、むしろ時制を超越して動作・存在そのものを表現する、と考えられます。それゆえ、判断を付加する助動詞が接続します。「べし」（当然）、「まじ」（打消当然）、「らし」「なり」「めり」（推定）などです。また、逆説的ですが、現在も表すことができることから「らむ」（現在推量）も終止形に接続します。

なお、特に注意しておきたいのは、これらの助動詞はすべて、ラ変動詞やラ変型活用には、連体形「ーる」に接続するということです。ラ変型活用形の出現頻度はかなり高いので、しっかり覚えておいてください。

さて、最後に何点か補足しておきます。

「むず」という助動詞がありますが、これは「むとす」が縮まった形です。なので接続は「む」と同じ未然形、ただし活用パターンはサ変です。

中世（院政期以降を想定しています）に、文字表記「ん」が発生してのちは、「ん」「んず」「けん」「らん」という表記が出現しますが、これらは「む」「むず」「けむ」「らむ」とまったく同じです。

最後に、これはたまにしか見ないと思いますが、上代には「ゆ」「らゆ」という助動詞がありました。これらは「る」「らる」と同じだと考えてください。

では、次の練習問題をやってみてください。

練習1 次の傍線部の語の活用形を記せ。

- ①花咲くべし。 ( )
- ②花咲くごとし。 ( )
- ③滝落ちけむ。 ( )
- ④滝落ちむ。 ( )

練習2 次の[ ]内の語を適当な形に改めよ。

- ①風[吹く]じ。 ( )
- ②人[尋<sup>たづ</sup>ぬ]けり。 ( )
- ③思ひ出に[す]む。 ( )
- ④花[美し]べし。 ( )

次に、「助動詞の活用パターン」に入ります。

助動詞の活用パターンは、いくつかの特殊型を除き、大多数が用言の活用パターンと同じです。それらは新たに覚え直す必要はないでしょう。文法のテキストに掲載されている活用表を見ると、出現しない活用形の所は「○」になっているとおもいますが、文中に出てこないだけなのだから、○の位置まで覚えることはないでしょう。そう割り切った方が楽に進めます。

以下に、活用のパターンを分類します。

## 2 助動詞の活用パターン

- A 下二段型…る、らる、す、さす、しむ、つ
- B ナ変型 …ぬ
- C ラ変型 …なり(推定)、めり、けり、たり(完了)、り
- D 形容詞型…べし、まじ、まほし、たし、ごとし
- E 形容動詞型…なり(断定)、たり(断定)
- F 特殊型 …じ、らし、む、けむ、らむ、き、まし、ず

上記のように分類して把握し、A～Eは用言の知識を活用して判断し、Fだけ新たに覚える、というのが効率的です。例えば、

「堀池の僧正とぞ言ひける」

という文の「ける」の活用形を判断する場合、「けり」の活用表を覚えておいて判断してもいいのですが、これはラ変型だから、「ら・り・り・る・れ・れ」で連体形だ、というように処理した方がスピーディーです。正確に助動詞の活用表を覚えるのも悪いことではないのですが、合理化できるところは合理化した方が、負担が少なくて済みます。

では、このあとまず、**Fの特殊型**を押さえていきます。  
これも4グループに括って覚えます。

### a 「じ」「らし」

助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
じ	○	○	じ	じ	じ	○
らし	○	○	らし	らし	らし	○

変化しません。楽勝です。

b 「む」「けむ」「らむ」

助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○

「四段型」とするテキストも多いのですが、むしろ「む型」として覚えた方がピンとくるでしょう。

「けむ」（過去推量）は、過去の助動詞「き」と推量の助動詞「む」が融合したもの、「らむ」（現在推量）は、ラ変動詞「あり」と推量の助動詞「む」が融合したもので、同じ活用パターンになります。

c 「き」「まし」

助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
き	せ	○	き	し	しか	○
まし	ましか	○	まし	まし	ましか	○

親近性があるので併せて覚えます。後に説明しますが、反実仮想（もしも～なら…なのになあ、という表現法）では、「～せば…まし」「～ましかば…まし」という形をとります。この二つの助動詞の未然形は、このパターンでのみ出現します。また、出現する活用形も共通なので、併せて覚えやすいと思います。

d 「ず」

助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ず	ず ざら	ず ざり	ず ○	ぬ ざる	ね ざれ	○ ざれ

主活用の未然形「ず」は「～ずは（～ないならば）」「ずとも（～ないとしても）」の形

だけで出現します。

第二活用は、連用形「ず」にラ変動詞「あり」が融合して生じたもので、主として助動詞を下接させる形ですが、已然形「ざれ」、命令形「ざれ」も一般的に使用されます。

以上が特殊型です。これらを覚えておけば、残りの助動詞は何型に属しているかを押さえておけばいいことになります。

ただし、ここでは念のため、それぞれのタイプの活用形を掲載しておきます。

#### A 下二段型…「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「つ」

助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ

「る」「らる」「す」「さす」「しむ」は、接続も同じであり、のちに説明しますが、動詞の主語を変えてしまうという機能も一緒なので、一括りで押さえておきましょう。

完了の助動詞「つ」は、実は「捨てる」という意味の「棄<sup>う</sup>つ」という下二段動詞の頭母音が脱落して発生しました。それで下二段型になっているわけです。ちなみにこの「棄つ」は、現代語にも「財産をなげうつ」というような形で残っています。

#### B ナ変型…「ぬ」

助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

完了の助動詞「ぬ」は、「行ってしまう」という意味のナ変動詞「往<sup>い</sup>ぬ」の頭母音が脱

落して生まれた助動詞です。それでナ変型になっています。

**C ラ変型 …なり(推定)、めり、けり、たり(完了)、り**

助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	○	なり	なり	なる	なれ	○
めり	○	めり	めり	める	めれ	○
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
けり	けら	○	けり	ける	けれ	○
り	ら	り	り	る	れ	れ

終止形が「り」で終わる助動詞はすべてラ変型です。それもそのはずで、これらは次のようにして発生しました。

音<sup>ね</sup>+あり→なり    見<sup>み</sup>+あり→めり    来+あり→けり    て+あり→たり

「り」については以前に説明したとおりです。

このタイプの助動詞の活用表では「○」の欄がありますが、要は、「出てこない」だけなので、覚えていなくても支障はないでしょう。「ラ変型はこれらの助動詞」ということを押さえておけば事足ります。ちなみに私は、キノコに引っかけて、「なめ茸<sup>たけ</sup>・り」と覚えています。

D 形容詞型…べし、まじ、まほし、たし、ごとし

助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
べし	べく べから	べく べかり	べし ○	べき べかる	べけれ ○	○ ○
まじ	まじく まじから	まじく まじかり	まじ ○	まじき まじかる	まじけれ ○	○ ○
まほし	まほしく まほしから	まほしく まほしかり	まほし ○	まほしき まほしかる	まほしけれ ○	○ ○
たし	たく たから	たく たかり	たし ○	たき たかる	たけれ ○	○ ○
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○

終止形が「し」で終わる助動詞は、特殊型「じ」「らし」「まし」を除いてすべて形容詞型です。「ごとし」以外は「カリ活用」があり、これには助動詞が下接します。

E 形容動詞型…なり(断定)、たり(断定)

助動詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
なり	なら	なりに	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たりと	たり	たる	たれ	たれ

断定の助動詞「なり」は、格助詞「に」とラ変動詞「あり」が融合して生じた助動詞です。一方、断定の助動詞「たり」は、格助詞「と」とラ変動詞「あり」が融合して生じた助動詞です。連用形の「に」「と」は、そのなごりで、ある特殊な形で出現しますが、これについてはのちほど説明します。



なお、一応「形容詞型」としましたが、ラ変型の連用形に「に」「と」を加えるだけで  
すから、この点を押さえておけば、新たに覚えるまでもないでしょう。

さて、以上で助動詞の活用パターンを一通り見てきましたが、補足として「むず」はサ  
変型、「ゆ」「らゆ」は下二段型、というのも一応覚えておいてください。

では、練習してみましょう。

練習3 次の傍線部の助動詞の活用形を記せ。

- ①都ぞ花の錦なりける ( )
- ②この女をこそ得め ( )
- ③頼むべからず ( )
- ④源氏の君まかでさせ給ふ ( )

練習4 次の( )内の助動詞を適当な形に改めよ。

- ①京より下り(き)時に、( )
- ②あしと思へ(り)けしきもなく、( )
- ③恐れの中に恐る(べし)けるは、( )
- ④何かあはれなら(ず)ん( )

今回はここまでにしておきましょう。次回から、助動詞の意味を確認していきます。  
なお、前回の復習問題の解答と、補強問題を掲載しておきますので、確認してください。

練習1・解答

- ①花咲くべし。( 終止形 )
- ②花咲くごとし。( 連体形 )
- ③滝落ちけむ。( 連用形 )
- ④滝落ちむ。( 未然形 )

練習2 次の[ ]内の語を適当な形に改めよ。

- ①風[吹く]じ。( 吹か )
- ②人[尋<sup>たづ</sup>ぬ]けり。( 尋ね )
- ③思ひ出に[す]む。( せ )
- ④花[美し]べし。( 美しかる )

練習3 次の傍線部の助動詞の活用形を記せ。

- ①都ぞ花の錦なりける ( 連体形 )
- ②この女をこそ得め ( 已然形 )
- ③頼むべからず ( 未然形 )

④源氏の君まかでさせ給ふ ( 連用形 ) ←「給ふ」は用言

練習4 次の( )内の助動詞を適当な形に改めよ。

- ①京より下り(き)時に、 ( し )
- ②あしと思へ(り)けしきもなく、 ( る )
- ③恐れの中に恐る(べし)けるは、 ( べかり )
- ④何かあはれなら(ず)ん ( ざら ) ←「ん」=「む」

復習問題2・解答

一	①	動詞・ハ行四段活用・連用形		
	⑤	形容詞・ク活用・連体形		
	⑦	動詞・バ行上二段活用・連用形		
	⑧	形容詞・ク活用・連用形		
	⑨	動詞・ワ行上一段活用・連体形		
	⑩	動詞・ラ行下二段活用・連体形		
	⑪	形容動詞・ナリ活用・連体形		
	⑫	動詞・サ行変格活用・終止形		
二	へ			
三	③	しだいに／だんだんと	④	たまたま
四	かくれ			

復習問題2・解説

問一

①は問題ないでしょう。⑤終止形は「やむごとなし」、「て」を付けると「やむごとなく・て」となりク活用。⑦「滅ぶ」は「滅び・ず」となって上二段活用。下に「たり」が来ているので連用形になります。⑧終止形は「のどけし」。「て」を付けると「のどけく・て」となりク活用。⑨「ある」は覚えておくべき動詞で、上一段活用。ちなみに、ワ行の表記は「わ・ゐ・う・ゑ・を」です。⑩「恐る」は「恐れ・ず」となり下二段活用。⑪、

⑫は問題ないと思います。

問二

一文字動詞「経」ですね。「へ・へ・ふ・ふる・ふれ・へよ」と活用しますが、本文では「経・たり」と下に「たり」があるので連用形、読みは「へ」です。

問三

古文単語も少しずつ覚えていきましょう。「やや」は「やうやう」と同じで「しだいに／だんだんと」の意味。現代語と混乱しないように。「おのづから」は「自づから」と漢字が当たり、「①自然に」の意味は覚えやすい。そこから「②たまたま」の意味も出てきて、さらに「③ひよっとすると」と意味が派生します。ここは②の意味。

問四

「かくる」は漢字で書くと「隠る」になります。こうすればわかりやすいでしょう。「ず」を付けると「かくれ・ず」になり、ラ行下二段活用。連用形は「かくれ」です。

## 補強問題 2 A (用言の判断)

1 傍線部の語を文法的に説明せよ。

①本意のごとく会ひにけり。( )

②行く川の流れは絶えずして、( )

③母の命尽きたるを知らずして、( )

④ある人、弓射ることを習ふに、( )

⑤ひがごとせん人をぞ、( )

⑥死ぬることのみ、機嫌をはからず。( )

⑦とんで火に入る夏の虫。( )

⑧いと心にくからめ。( )

⑨漫々たる海上なれば、( )

⑩同じう死なば、( )

補強問題 2 B (用言の活用)

1 次の ( ) 内の動詞を適当な形に改めよ。

- ① 心なしと (見ゆ) 者にも、 ( )
- ② (悔ゆ) ても遅ければ、 ( )
- ③ 猛き者もつひには (滅ぶ) ぬ。 ( )
- ④ 沖より (寄す) 白波にも、 ( )
- ⑤ 尊くこそ (おはす) けれ。 ( )
- ⑥ 先達は (あり) まほしきことなり。 ( )
- ⑦ 聞きしにも (過ぐ) て、 ( )
- ⑧ 山までは (見る) ず。 ( )
- ⑨ うるはしき花こそ、(めでたし)。 ( )
- ⑩ (ならびなし) べきことなり。 ( )